

高齢社会に関する 意識調査報告書

2012年5月

一般財団法人

経済広報センター

はじめに

現在、高齢期の長い間を自立的に暮らす人たちが増えています。アクティブな高齢期を、誰と、どこで、どのように暮らしていくかは、高齢者だけでなく、現役の世代にとっても早くから考えておくべき大切なテーマです。

本来、人間が長生きするという長寿社会の実現は誇るべきことです。しかし、高齢者が急激に増加し生産年齢人口が相対的に減少することは、日本に構造的に深刻な影響を与えます。社会保障制度をはじめ、社会経済システムの見直しが避けられません。

そこで、経済広報センターは、全国の様々な職種、世代により構成されている当センターの「社会広聴会員」を対象に、高齢期の暮らし方や高齢社会の一層の進展に備えて取るべき対策について意見を伺いました。

今回の調査結果からは、高齢期について多くの人が、隠居、隠遁という旧来のイメージには当てはまらない、活動的な生活・暮らしぶりを志向していることが確認されました。

高齢社会の一層の進展には多くの人が不安を感じ、「十分な社会保障(年金・医療)が受けられない」「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」を危惧しています。対策としては「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」「医療費・介護費の抑制」を特に強く期待しています。その一方で、高齢期にも働きたいと回答した方は約6割にも上りました。そのうち6割強は少なくとも70歳ぐらいまでは働く意向を持っていました。高齢期に期待できることとしては、「趣味・娯楽に打ち込める」「豊富な自由時間を利用して、これまでできなかったことにトライする」というポジティブな項目が上位に挙がっています。

いくつかの調査項目では、世代間の意識の相違も確認されました。高齢社会の課題を検討・議論する際には、それぞれの世代が置かれた立場、視点の違いに十分留意する必要があると思われます。

本報告書が、生活者の皆さまや企業が、高齢期の生活を点検または展望し、また超高齢社会の在り方を考える上での一助になれば幸甚です。

一般財団法人 経済広報センター
常務理事・事務局長
中山 洋

目 次

| | |
|-----------------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 調査結果の概要 | 4 |
| 調査結果データ | |
| 1. 「老人」「シニア」「高齢者」という言葉からイメージする年齢 | 8 |
| 2. 高齢期を共に暮らしたい人 | 12 |
| 3. 高齢期に暮らしたいところ | 13 |
| 4. 高齢期に暮らしたい住まい | 14 |
| 5. 高齢期の就業 | 16 |
| (1) 高齢期に働く意向 | 16 |
| (2) 働き続けたい年齢 | 17 |
| (3) 高齢期に働く理由 | 19 |
| 6. 高齢期の生活・暮らし | 21 |
| (1) 高齢期の生活・暮らしについて期待できること | 21 |
| (2) 高齢期の生活・暮らしについて不安に思うこと | 23 |
| (3) 高齢期の生活・暮らしへの意識 | 25 |
| 7. 高齢期に向けて備えていること<59歳以下> | 27 |
| 8. 自立的な生活を長く送るために取り組んでいること<60歳以上> | 28 |
| 9. 高齢社会の進展について不安に感じること | 29 |
| 10. 高齢社会の進展に備え取るべき対策 | 30 |

調査結果の概要

1. 「高齢者」という言葉のイメージは、「70歳以上の年齢層」が75%

「高齢者」という言葉からイメージする年齢層を聞いたところ、最も回答が多かったのは「70歳以上」(34%)であり、「75歳以上」「80歳以上」など70歳以上の年齢層を答えた割合は75%に上る。

高齢になるほど「高齢者」という言葉に、より高い年齢をイメージする傾向が見て取れる。60歳代、70歳以上の回答者においては、「75歳以上」「80歳以上」など75歳以上の高齢を回答する割合が、それぞれ52%、58%に達している。

2. 高齢期に6割は自宅に住み続け、3割は何らかの住み替えを希望

高齢期に主にどのような住まいで暮らしたいと思うかを聞いたところ、6割が「自宅に住み続ける」と回答している。約3割は何らかの形で住み替えたいと考えており、「自宅を住み替える(高層階から低層階へなど)」が16%、「高齢者向け住宅に住み替える」が13%となっている。

3. 男女や世代を通じて、約6割が、高齢期も「働きたい」

高齢期に働きたいと思うかを聞いたところ、「パートタイム・アルバイトなどで働きたい」(48%)が約半数を占め、「フルタイムで働きたい」(10%)と合わせて約6割は働きたいと回答している。

4. 「65歳ぐらいいまで働きたい」「70歳ぐらいいまで働きたい」が共に27%。4人に1人は「いつまでも働きたい」

高齢期に働く意向がある回答者を対象に、何歳まで働きたいかを聞いたところ、「65歳ぐらいいまで」「70歳ぐらいいまで」が共に27%に上る。また、4人に1人は「働けるうちはいつまでも」と回答しており、6割強が少なくとも70歳までは働く意向がある。

5. 高齢期の生活・暮らしについて期待できることは「趣味・娯楽に打ち込める」「心穏やかに過ごせる」が50%強で上位

高齢期の生活・暮らしについて期待できることを聞いたところ、「趣味・娯楽に打ち込める」(55%)という活動的な項目と、「心穏やかに過ごせる」(54%)という項目が上位に並び、続いて「豊富な自由時間を利用して、これまでできなかったことにトライする」(47%)という意欲的な項目が挙げられている。

6. 高齢期の生活・暮らしについて、若い世代は家計への不安、高齢世代は健康への不安が大きい

高齢期の生活・暮らしについて不安に思うことを聞いたところ、「収入（年金など）が減少し、生活が苦しくなる」が67%、「健康で自立した生活を送ることができなくなる」が64%と、家計と健康に関する不安が上位に並ぶ。

世代別で見ると、29歳以下、30歳代、40歳代では「収入が減少し、生活が苦しくなる」という家計への不安が約80%とほかの項目を引き離して高い。60歳代、70歳以上の高齢世代では家計への不安は後退し、代わりに「健康で自立した生活を送ることができなくなる」という健康不安がそれぞれ69%、80%と高く、最上位に挙げられている。

7. 高齢期の生活・暮らしについて、高齢世代ほど楽観的で、若い世代では楽観と悲観が均衡

高齢期の生活・暮らしについて楽観的に考えているか、悲観的に考えているかを聞いたところ、「どちらかというとき肯定的・楽観的」が42%と最も多く、「肯定的・楽観的」12%と合わせて、半数以上が肯定的・楽観的である。4人に1人は「どちらでもない」と回答している。

29歳以下では「肯定的・楽観的（肯定的・楽観的／どちらかというとき）」が37%で「否定的・悲観的（否定的・悲観的／どちらかというとき）」が40%とわずかに悲観派が上回る。30歳代でも、楽観派と悲観派は37%対34%とほぼ拮抗している。楽観派の比率は回答者の世代が上がるにつれて高まり、60歳代、70歳以上の高齢世代では約7～8割の圧倒的多数が楽観的である。

8. 59歳以下の2人に1人は、高齢期に備えて「日々の節約、貯蓄」「健康維持・体力づくり」に取り組んでいる

9. 60歳以上の約7割が、健康で自立的な生活を長く送るために、「バランスの良い食事」「規則正しい生活」「趣味、学習、勤労、地域活動やボランティア活動への参加」を実践

10. 高齢社会の進展について不安に感じることは、「十分な社会保障（年金・医療）が受けられない」「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」が上位3項目

11. 高齢社会の進展に備え取るべき対策は、「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」「医療費・介護費の抑制」が上位2項目

高齢社会の進展に備え取るべき対策を聞いたところ、「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」(55%)、「医療費・介護費の抑制」(53%)が5割強と高い。「政府・自治体の事業、人員、経費の見直しによる財政支出削減」(46%)は第3位に挙げられている。

「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」は、29歳以下および30歳代の若い年齢層で、それぞれ63%、62%という高さで最上位となっている。

- ・ 調査対象：3,142人
- ・ 調査方法：インターネットによる回答選択方式および自由記述方式
- ・ 調査期間：2012年3月8日～3月19日
- ・ 有効回答：2,015人 (64.1%)
- ・ 回答者の属性：
 - 男女別：男性 (883人、43.8%)、女性 (1,132人、56.2%)
 - 世代別：29歳以下 (138人、6.8%)、30歳代 (263人、13.1%)、40歳代 (460人、22.8%)、50歳代 (528人、26.2%)、60歳代 (362人、18.0%)、70歳以上 (264人、13.1%)
 - 職業別：会社員・団体職員・公務員 (819人、40.6%)、会社役員・団体役員 (93人、4.6%)、自営業・自由業 (156人、7.7%)、パートタイム・アルバイト (276人、13.7%)、その他職業 (27人、1.3%)、学生 (33人、1.6%)、専業主婦・夫 (354人、17.6%)、無職・その他 (257人、12.8%)

この調査では、回答者に対して、高齢期を「定年退職後、または定年がない場合は60歳以降に、おおむね自立して生活できている状況」と想定して回答することを求めた。

また、高齢期の暮らし方についての意向や見通しについての設問では、既に高齢期を迎えている回答者には、現在の考え・気持ちを回答することを求めた。

調査結果 データ

1. 「老人」「シニア」「高齢者」という言葉からイメージする年齢

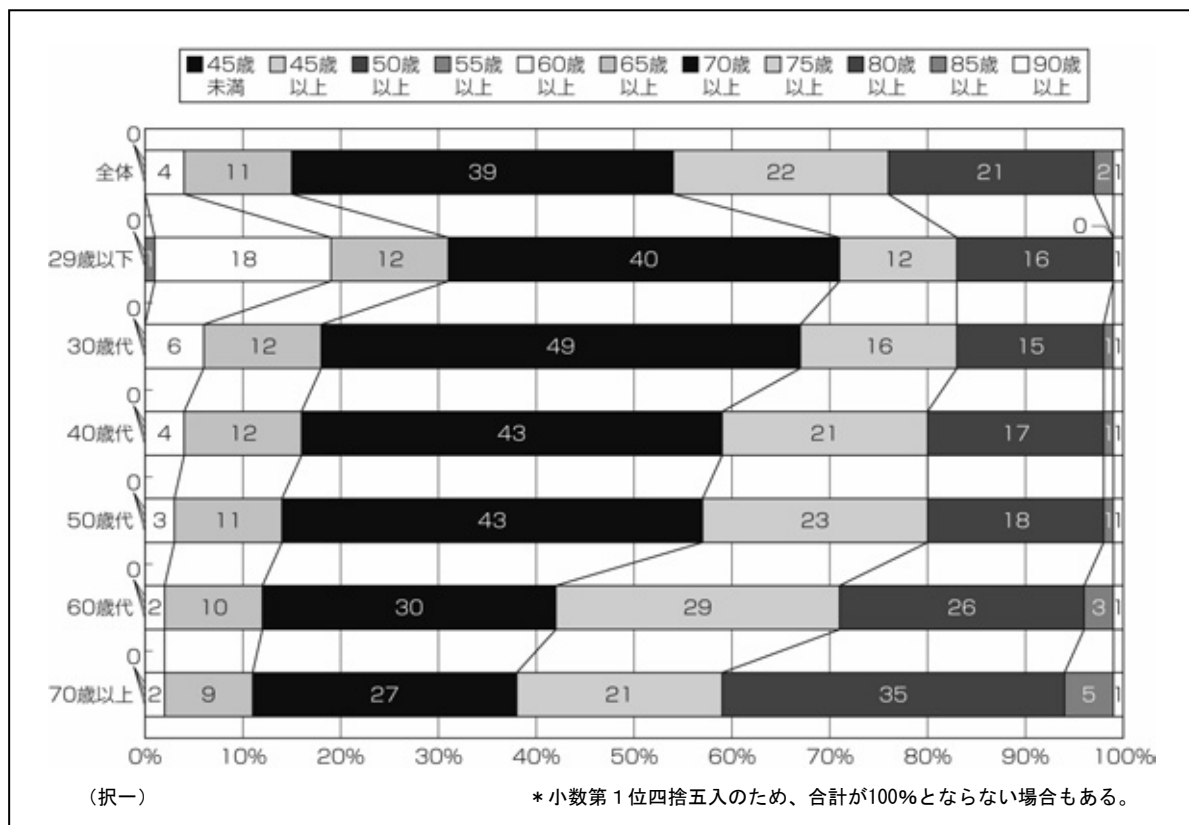
「高齢者」という言葉のイメージは、「70歳以上の年齢層」が75%

「老人」「シニア」「高齢者」それぞれの言葉から思い浮かべる年齢は何歳以上かを聞いた。

「老人」については、最も回答が多かったのは「70歳以上」(39%)で、次が「75歳以上」(22%)である。(図1)

世代別(図1)では、高齢になるほど「老人」という言葉に、より高い年齢をイメージする傾向が見て取れる。60歳代、70歳以上の回答者においては、「75歳以上」「80歳以上」など75歳以上の年齢層を回答する割合が半数を超え、それぞれ59%、62%と、全体の約6割となっている。

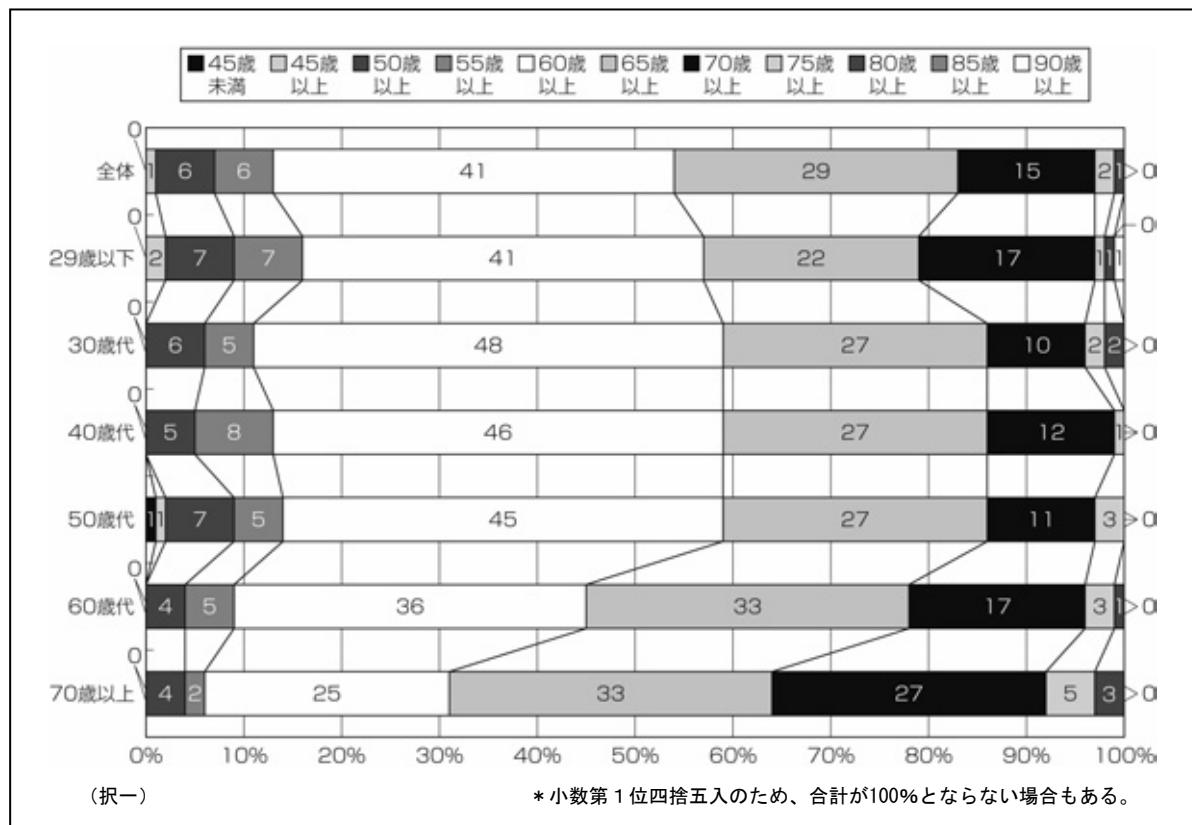
図1 「老人」という言葉からイメージする年齢(全体・世代別)



「シニア」については、最も回答が多かったのは「60歳以上」(41%)で、次が「65歳以上」(29%)である。(図2)

世代別(図2)では、60歳代、70歳以上の回答者において「シニア」という言葉に、より高い年齢をイメージする傾向が見られる。これら世代においては「60歳以上」との回答が4割を割り込み、65歳以上の年齢層を回答する割合が、全体の約5割を超えている。

図2 「シニア」という言葉からイメージする年齢(全体・世代別)

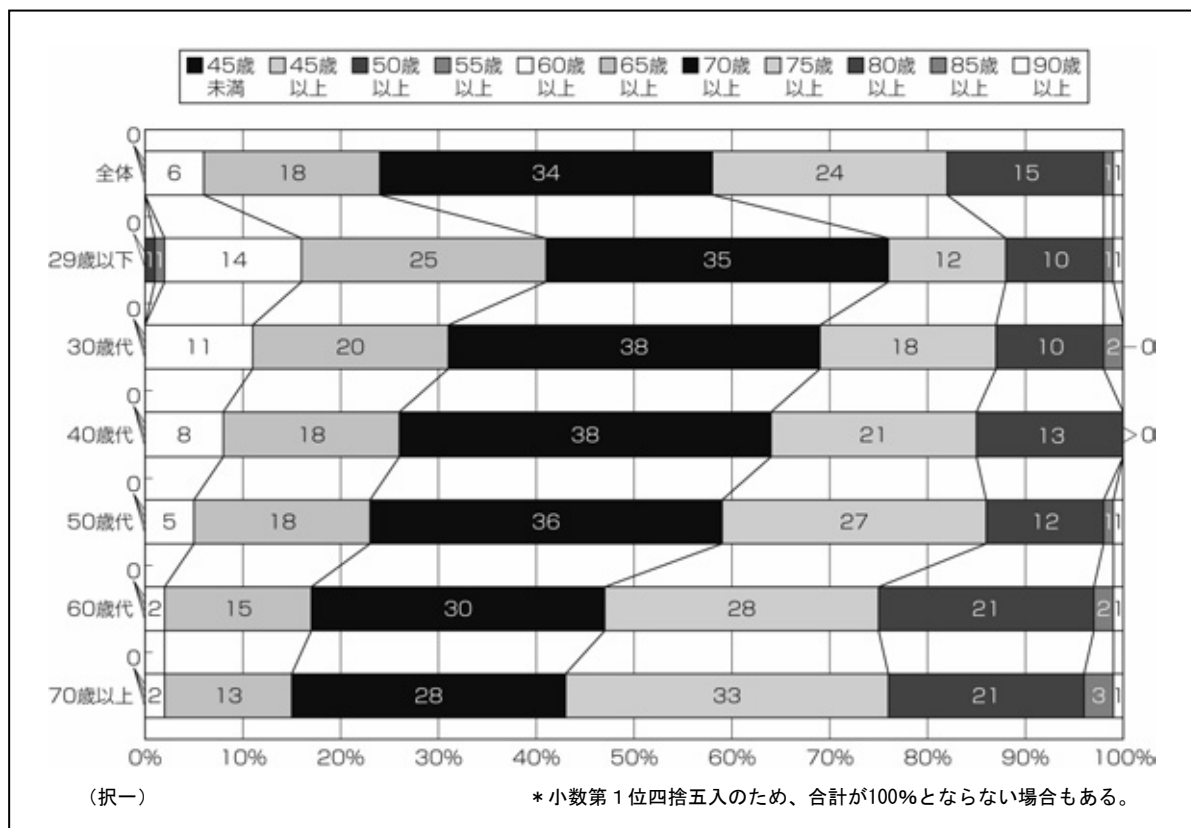


「高齢者」については、最も回答が多かったのは「70歳以上」(34%)であり、「75歳以上」「80歳以上」など70歳以上の年齢層を答えた割合は75%に上る。「65歳以上」とした回答者は18%にとどまり、多くの人が「高齢者」について、WHO（世界保健機関）による定義である65歳以上よりも、高い年齢層をイメージしているといえる。(図3)

世代別(図3)では、高齢になるほど「高齢者」という言葉に、より高い年齢をイメージする傾向が見て取れる。60歳代、70歳以上の回答者においては、「75歳以上」「80歳以上」など75歳以上の高齢を回答する割合が、それぞれ52%、58%に達している。また、60歳代の回答者で「60歳以上」「65歳以上」と答えた割合の合計は17%に過ぎず、60歳代の約8割は自分自身を「高齢者」とは認識していないといえる。

高齢を示す様々な言葉について、若い世代と高齢世代でイメージする年齢層が異なることは、高齢社会について考え議論する際に留意すべき点のひとつと思われる。

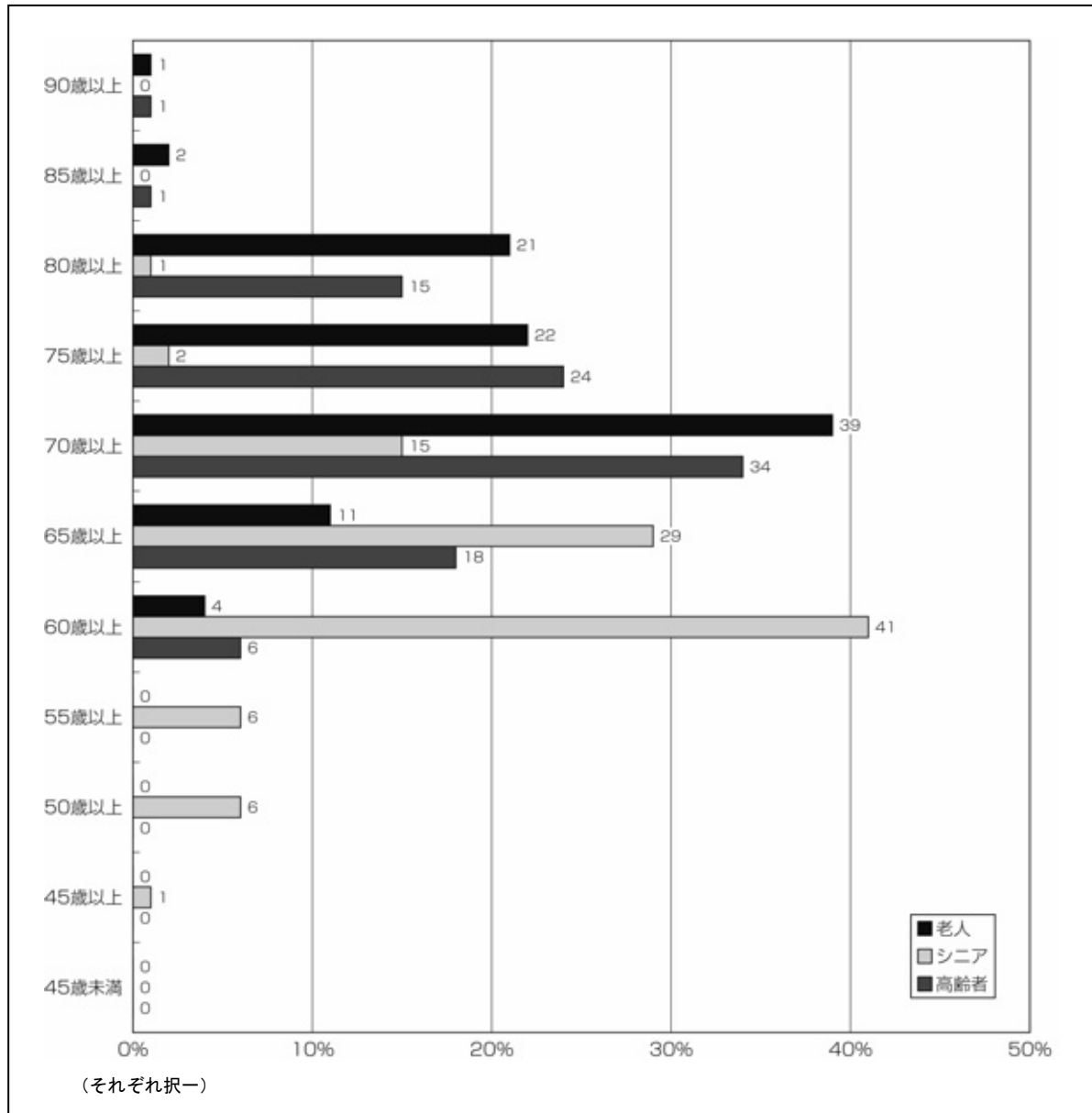
図3 「高齢者」という言葉からイメージする年齢(全体・世代別)



「老人」「シニア」「高齢者」それぞれについて、最も回答が集まった年齢層は「老人」が「70歳以上」(39%)、「シニア」が「60歳以上」(41%)、「高齢者」が「70歳以上」(34%)である。

3つの言葉のうち、「シニア」が最も若いイメージを持つといえる。(図4)

図4 「老人」「シニア」「高齢者」という言葉からイメージする年齢(全体)



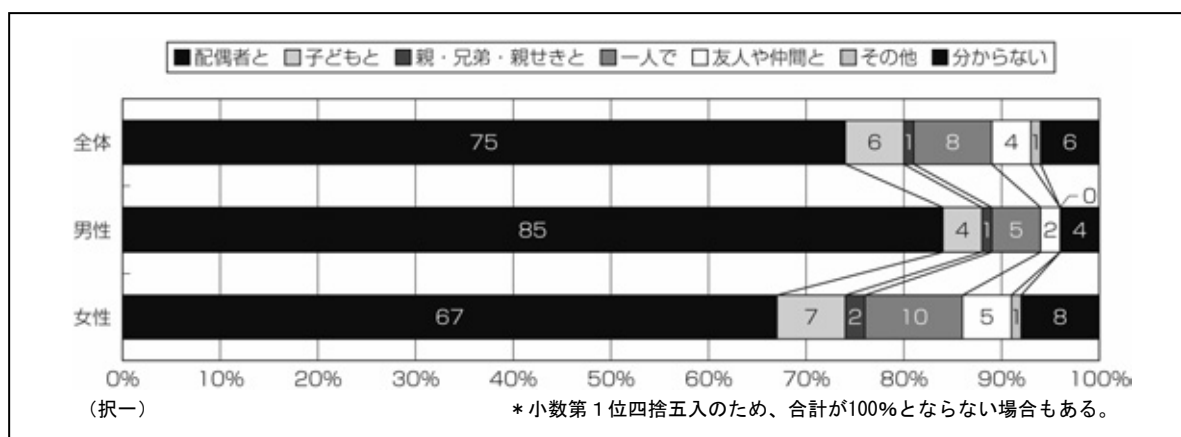
2. 高齢期を共に暮らしたい人

75%が、高齢期を主に「配偶者と」暮らしたい

高齢期に主に誰と暮らしたいと思うかを聞いたところ、75%が「配偶者と」と回答している。「一人で」との回答は8%である。(図5)

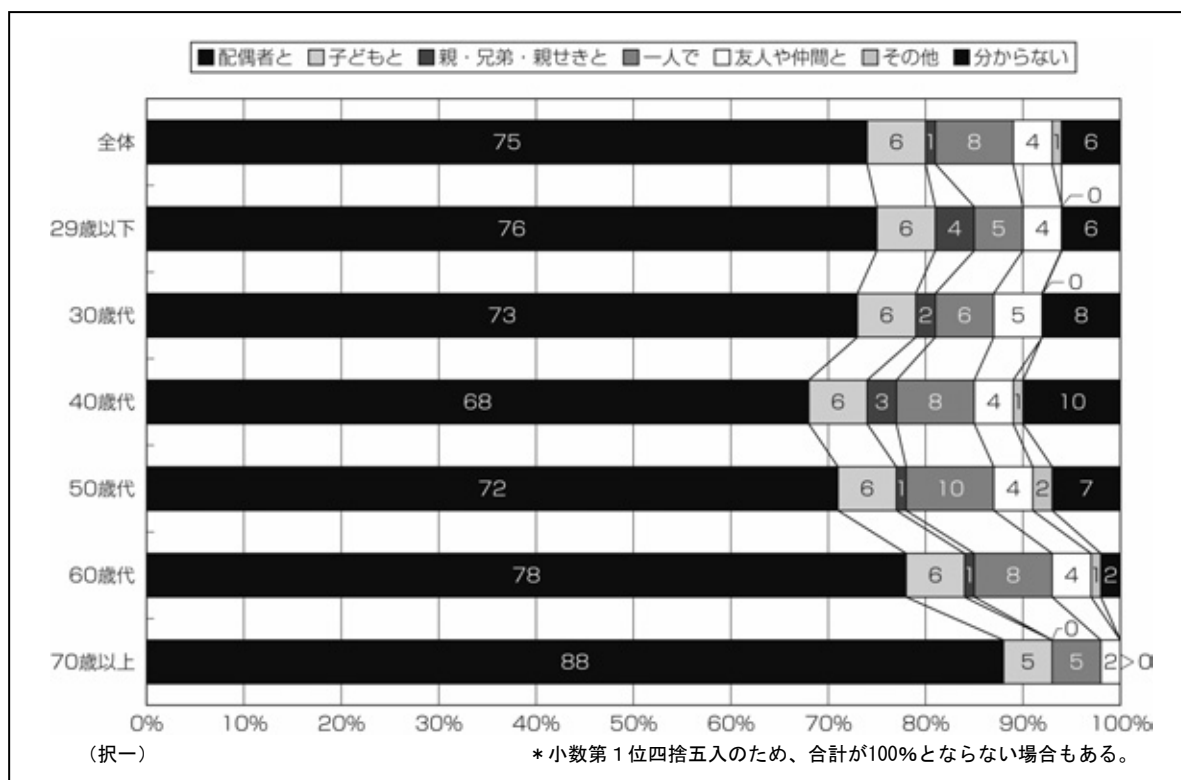
男女別(図5)で見ると、「配偶者と」暮らしたいとする回答は、男性85%、女性67%と、男性が18ポイント上回る。

図5 高齢期を共に暮らしたい人(全体・男女別)



世代別(図6)で見ると、「配偶者と」は、70歳以上で88%と最も高い。

図6 高齢期を共に暮らしたい人(全体・世代別)

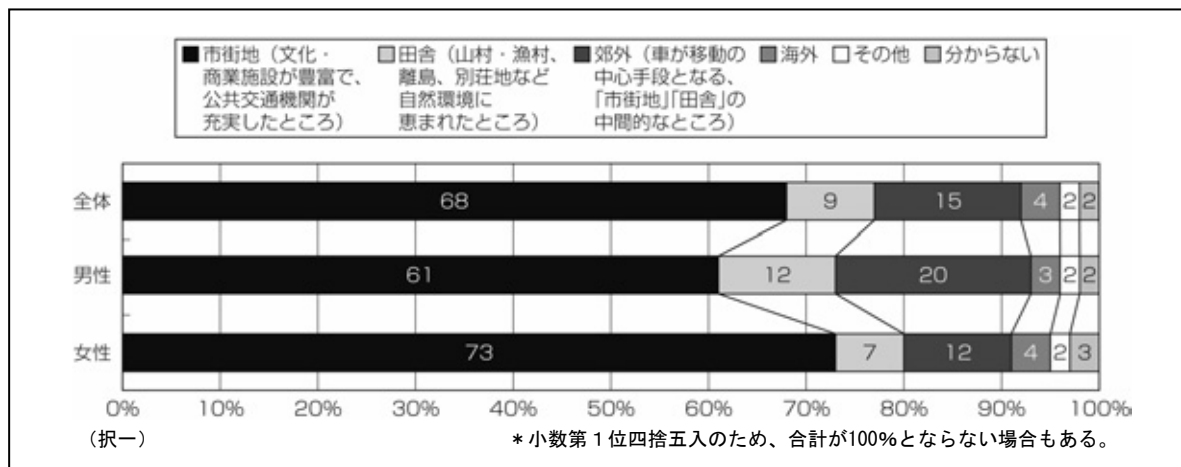


3. 高齢期に暮らしたいところ

約7割が、高齢期を主に「市街地」で暮らしたい

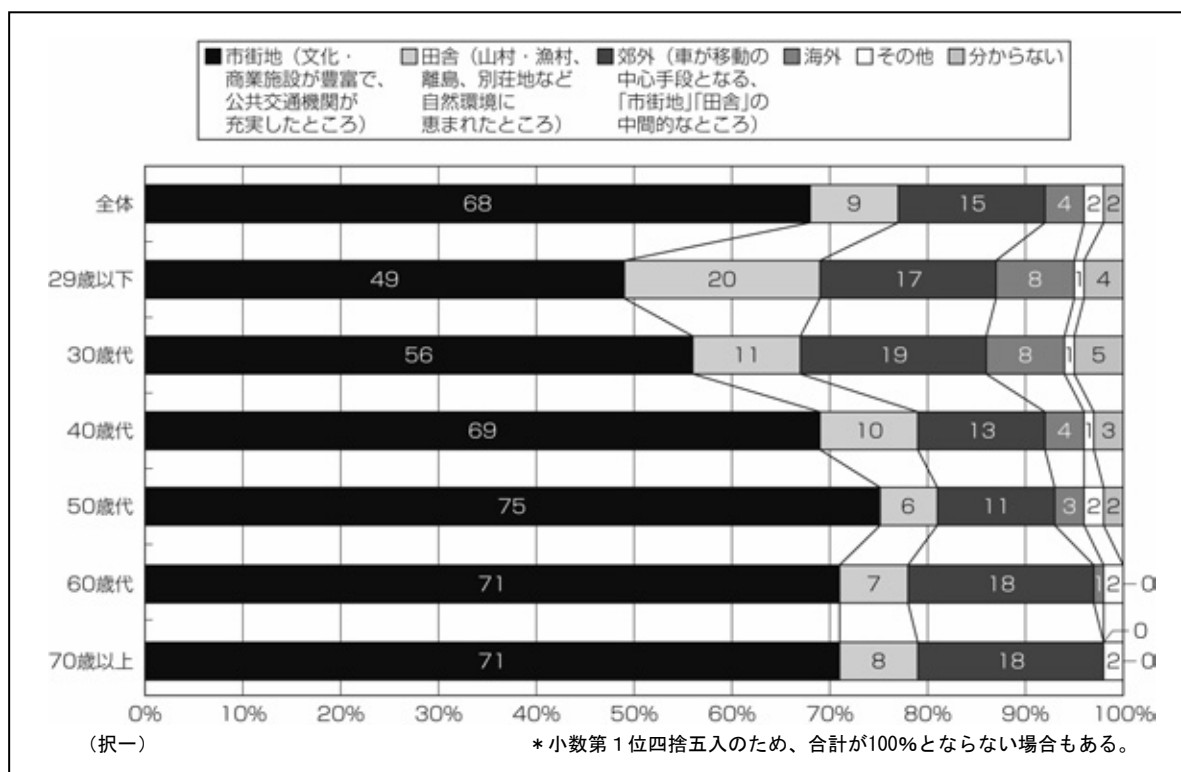
高齢期に主にどこで暮らしたいと思うかを聞いたところ、約7割が「市街地（文化・商業施設が豊富で、公共交通機関が充実したところ）」と回答している。（図7）

図7 高齢期に暮らしたいところ（全体・男女別）



世代別（図8）で見ると、29歳以下、30歳代の若い世代では「市街地」がそれぞれ49%、56%とほかの世代より低く、「海外」（8%）の回答割合が比較的高い。29歳以下では「田舎（山村・漁村、離島、別荘地など自然環境に恵まれたところ）」が比較的高い（20%）のも特徴である。

図8 高齢期に暮らしたいところ（全体・世代別）

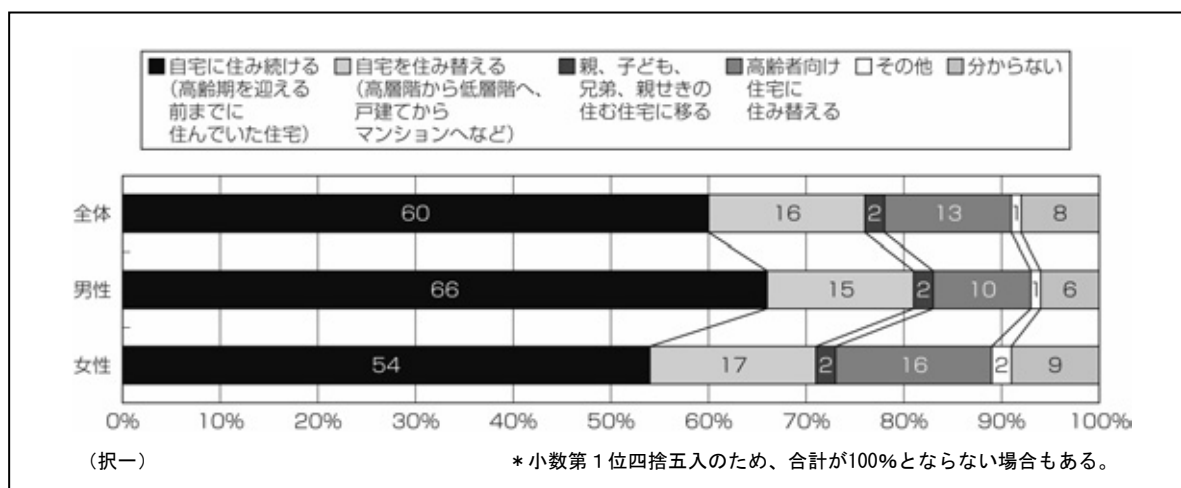


4. 高齢期に暮らしたい住まい

6割は自宅に引き続き、3割は何らかの住み替えを希望

高齢期に主にどのような住まいで暮らしたいと思うかを聞いたところ、6割が「自宅に引き続き（高齢期を迎える前までに住んでいた住宅）」と回答している。約3割は何らかの形で住み替えたいと考えており、「自宅を住み替える（高層階から低層階へ、戸建てからマンションへなど）」が16%、「高齢者向け住宅*に住み替える」が13%となっている。（図9）

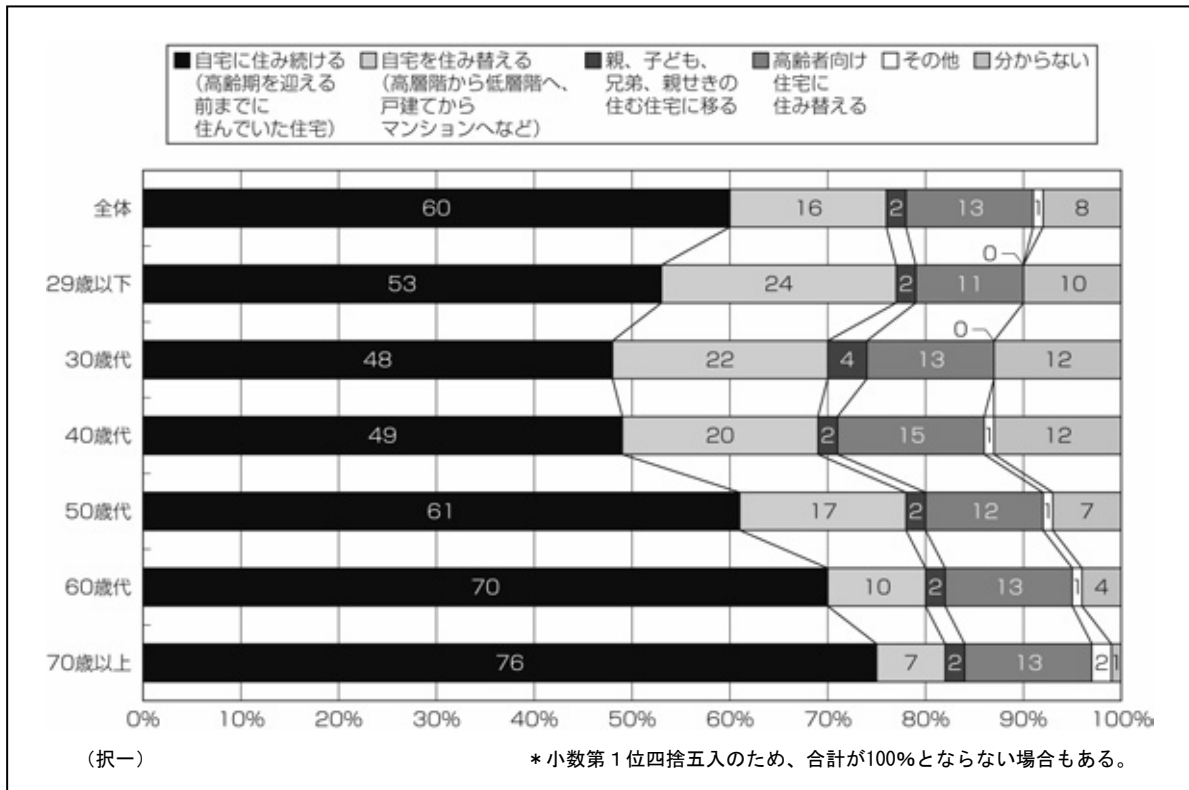
図9 高齢期に暮らしたい住まい（全体・男女別）



*バリアフリーで、生活支援サービス（安否確認、生活相談など）を受けられる住まい。例えばケアハウス、シルバーハウジング（公営住宅）、サービス付き高齢者向け賃貸住宅、有料老人ホームなど。

世代別（図10）で見ると、29歳以下、30歳代、40歳代で「自宅を住み替える」が20%以上となっている。「高齢者向け住宅に住み替える」は、すべての世代を通じて11～15%の一定の支持が見られる。

図10 高齢期に暮らしたい住まい（全体・世代別）



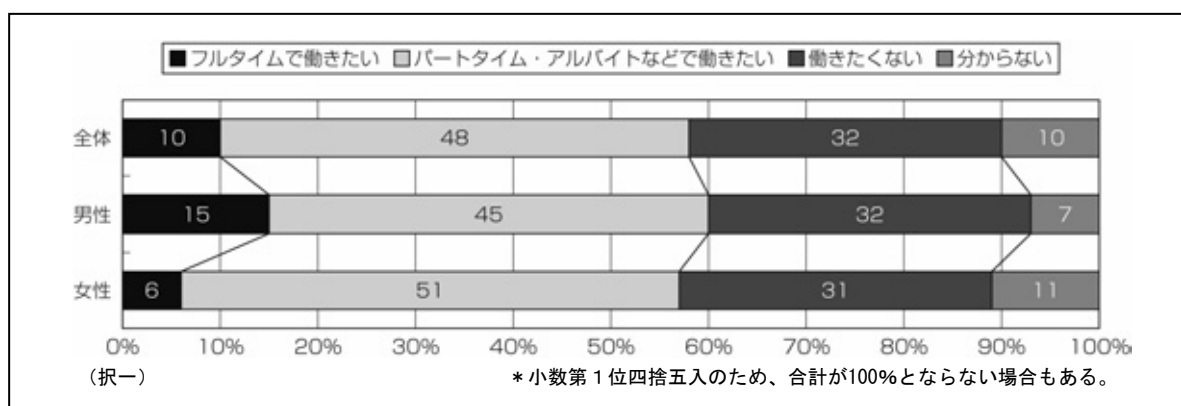
5. 高齢期の就業

(1) 高齢期に働く意向

男女や世代を通じて約6割が、高齢期も「働きたい」

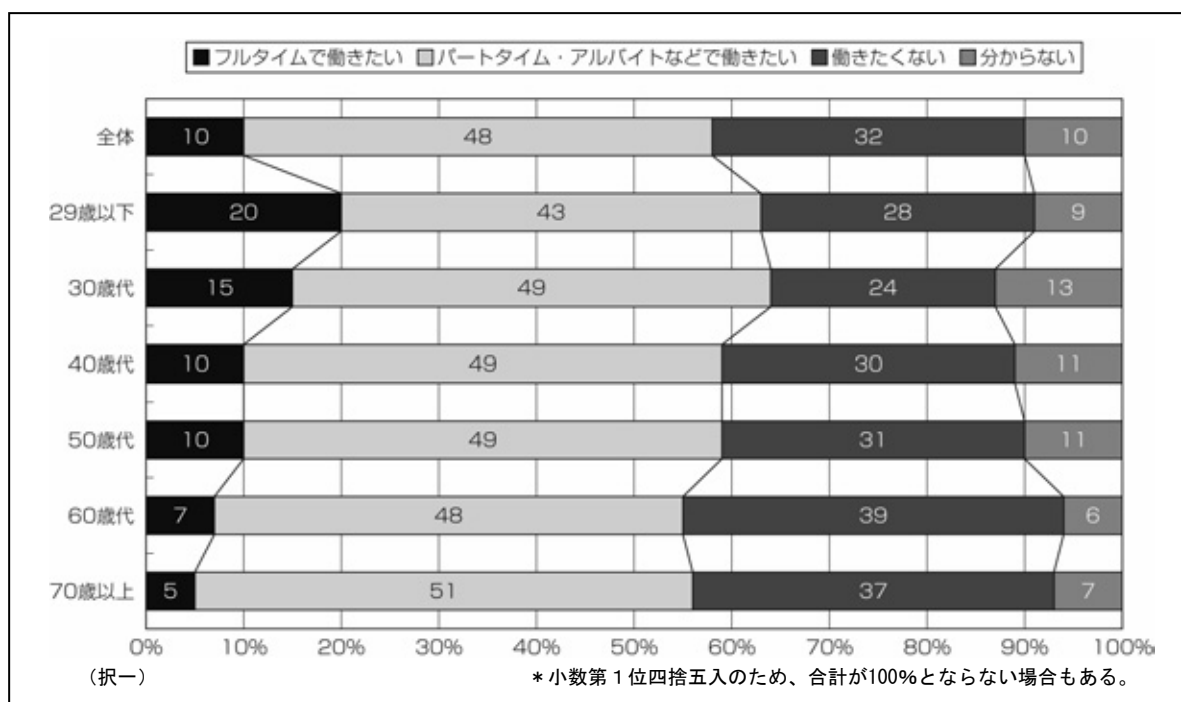
高齢期に働きたいと思うかを聞いたところ、「パートタイム・アルバイトなどで働きたい」(48%)が約半数を占め、「フルタイムで働きたい」(10%)と合わせて約6割は働きたいと回答している。この値は男性が60%、女性が57%であり、高齢期に働く意向に男女差は見られない。(図11)

図11 高齢期に働く意向 (全体・男女別)



世代別(図12)では、高齢期に働く意向に大きな差異は見られない。60歳代、70歳以上においても、「フルタイムで働きたい」と「パートタイム・アルバイトなどで働きたい」を合わせた回答割合は5割を超えている。

図12 高齢期に働く意向 (全体・世代別)



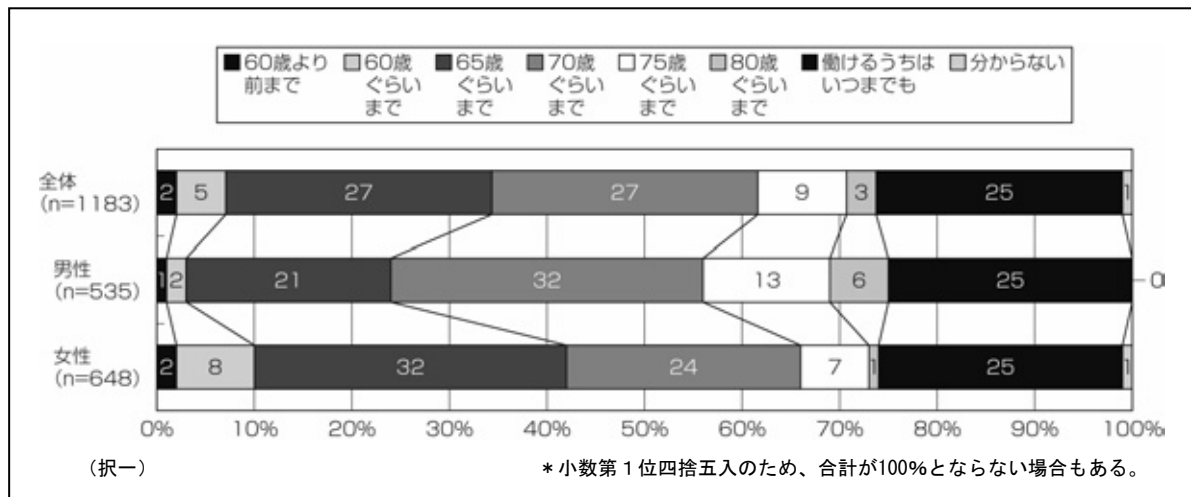
(2) 働き続けたい年齢

「65歳ぐらいまで働きたい」「70歳ぐらいまで働きたい」が共に27%。4人に1人は「いつまでも働きたい」

高齢期に働く意向がある回答者58%（「働きたい（フルタイムで／パートタイム・アルバイトなどで）」（図11））を対象に、何歳まで働きたいかを聞いたところ、「65歳ぐらいまで」「70歳ぐらいまで」が共に27%に上る。また、4人に1人は「働けるうちはいつまでも」と回答しており、6割強が少なくとも70歳までは働く意向がある。（図13）

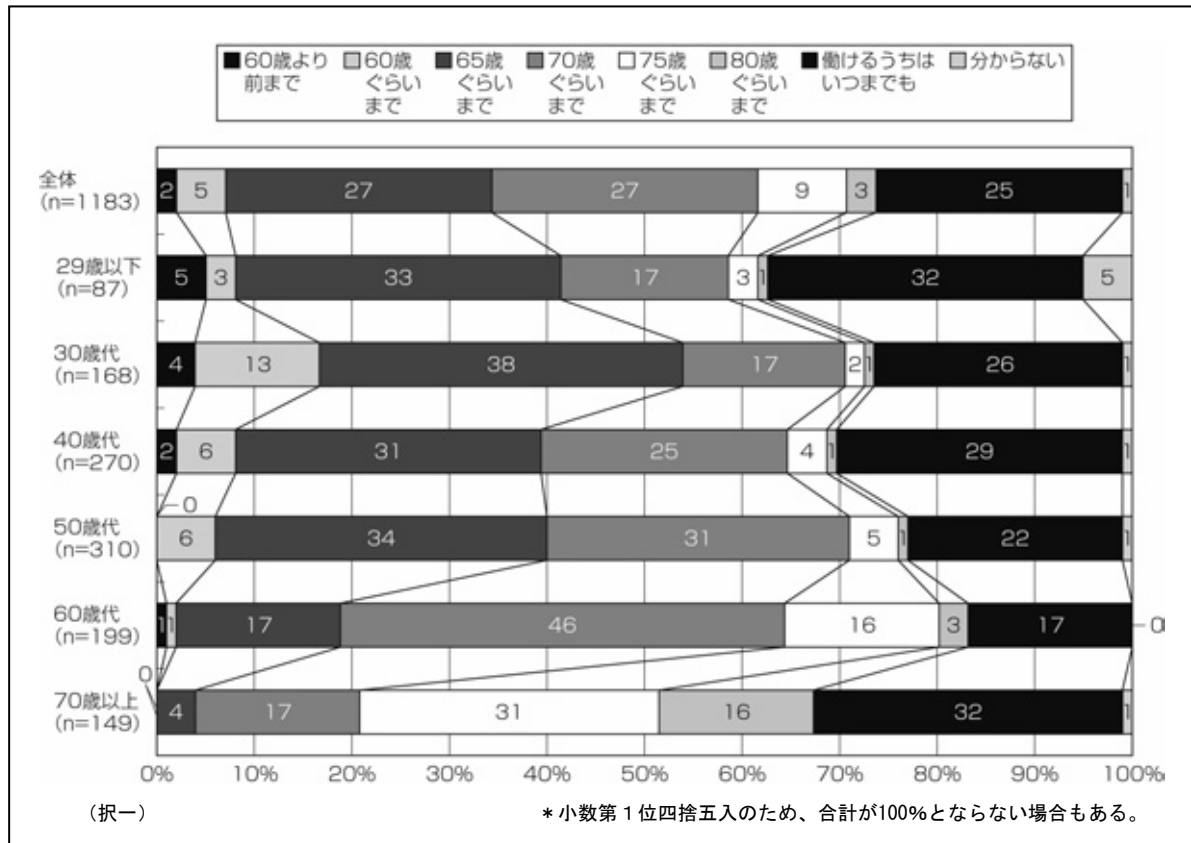
男女別（図13）で見ると、男性では「70歳ぐらいまで」（32%）が最も多いのに対して、女性では「65歳ぐらいまで」（32%）が最も多く、男性の方がより高齢まで働く希望を持っている。

図13 働き続けたい年齢（全体・男女別）



世代別（図14）で見ると、29歳以下から50歳代までの世代においては「65歳ぐらいまで」との回答が最も多いのに対して、60歳代では「70歳ぐらいまで」（46%）、70歳以上では「働けるうちはいつまでも」（32%）が最上位に挙げられている。

図14 働き続けたい年齢（全体・世代別）

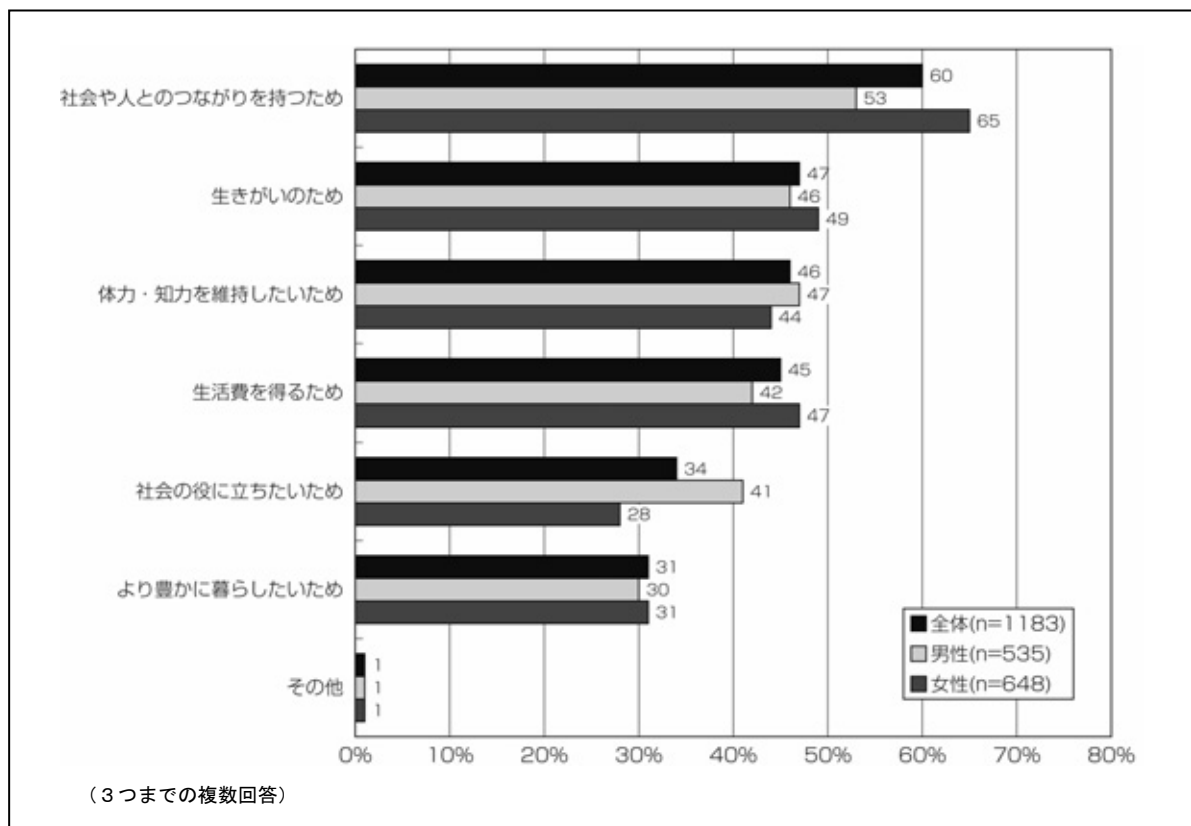


(3) 高齢期に働く理由

高齢期に働くのは「社会や人とのつながりを持つため」が60%

高齢期に働く意向がある回答者58%（「働きたい（フルタイムで／パートタイム・アルバイトなどで）」（図11））を対象に、働きたいと思う理由を聞いたところ、「社会や人とのつながりを持つため」が60%と最も多い。以下、「生きがいのため」（47%）、「体力・知力を維持したいため」（46%）、「生活費を得るため」（45%）が続く。（図15）

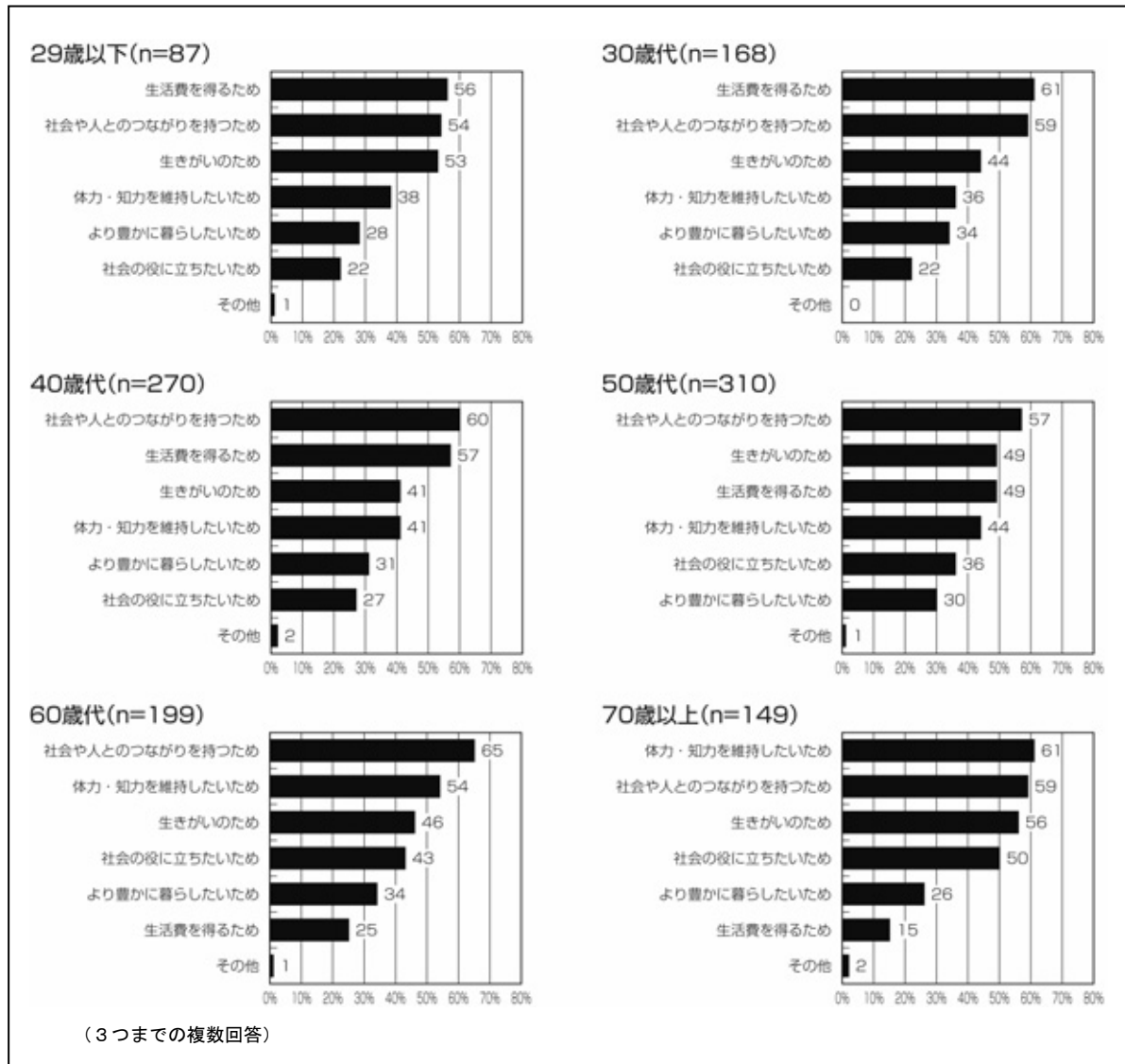
図15 高齢期に働く理由（全体・男女別）



世代別（図16）で見ると、世代間で働く理由に違いがあることが確認できる。

29歳以下、30歳代の若い世代では「生活費を得るため」がそれぞれ56%、61%と最上位に挙げられるが、世代が上がるに伴い順位は落ち、60歳代、70歳以上の高齢世代ではそれぞれ25%、15%と最下位である。代わりに60歳代、70歳以上の高齢世代が多く挙げるのは「体力・知力を維持したいため」であり、70歳以上では61%と最上位となっている。

図16 高齢期に働く理由（世代別）



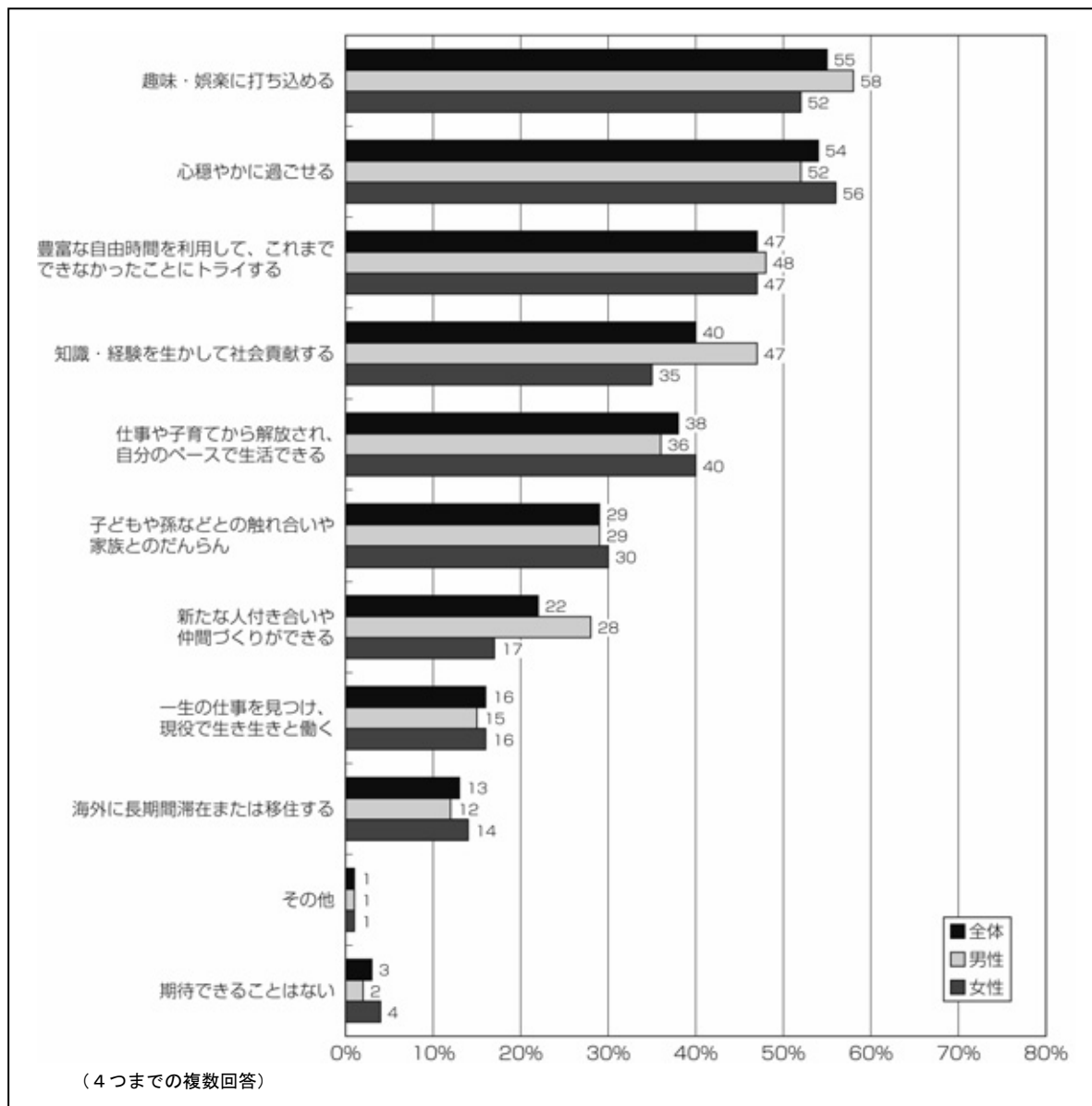
6. 高齢期の生活・暮らし

(1) 高齢期の生活・暮らしについて期待できること

「趣味・娯楽に打ち込める」「心穏やかに過ごせる」が50%強で上位

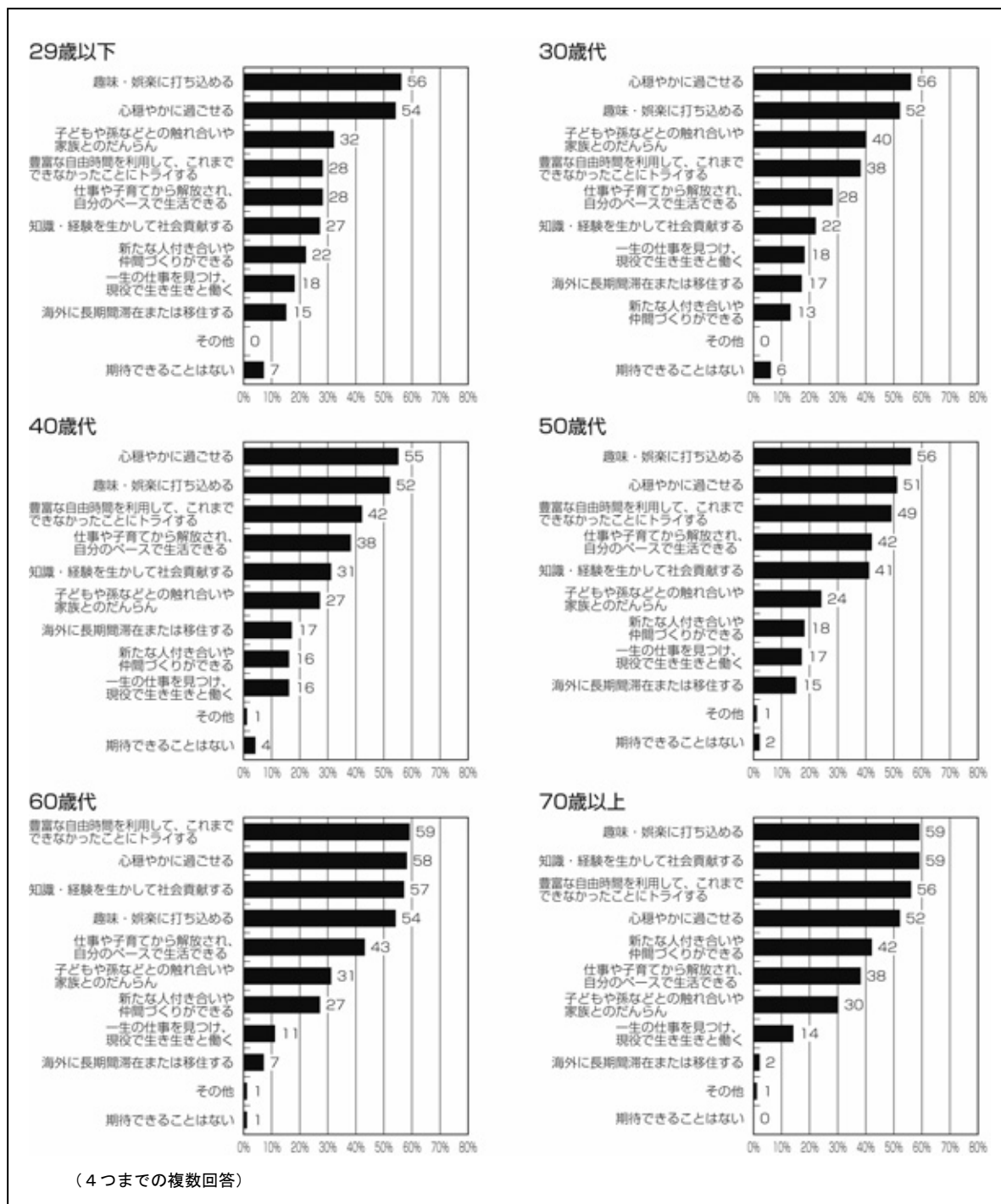
高齢期の生活・暮らしについて期待できることを聞いたところ、「趣味・娯楽に打ち込める」(55%)という活動的な項目と、「心穏やかに過ごせる」(54%)という項目が上位に並び、続いて「豊富な自由時間を利用して、これまでできなかったことにトライする」(47%)という意欲的な項目が挙げられている。多くの人が、隠居、隠遁といった旧来の高齢期の生活イメージに当てはまらない、アクティブな暮らしぶりを志向している。(図17)

図17 高齢期の生活・暮らしについて期待できること（全体・男女別）



世代別（図18）で見ると、60歳代、70歳以上の高齢世代では「知識・経験を生かして社会貢献する」がそれぞれ57%、59%と高く、特に70歳以上の世代では、全体で第1位の「趣味・娯楽に打ち込める」と並んで最上位に挙げられているのが特徴的である。高齢世代にとって、自身が積み上げた知識・経験を社会に還元し貢献することが大きな楽しみのひとつとして意識されているようだ。

図18 高齢期の生活・暮らしについて期待できること（世代別）



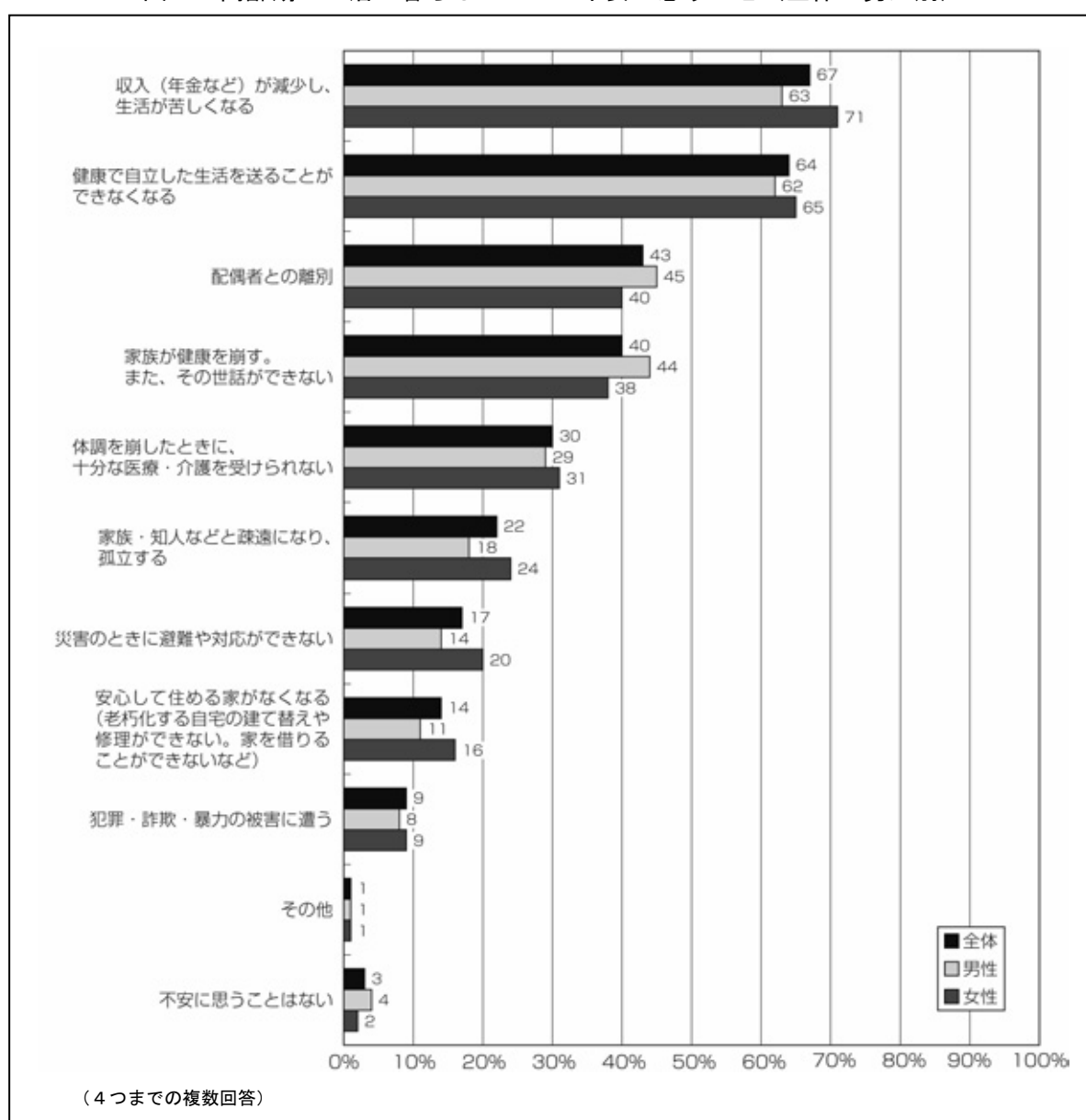
(2) 高齢期の生活・暮らしについて不安に思うこと

若い世代は家計への不安、高齢世代は健康への不安が大きい

高齢期の生活・暮らしについて不安に思うことを聞いたところ、「収入（年金など）が減少し、生活が苦しくなる」が67%、「健康で自立した生活を送ることができなくなる」が64%と、家計と健康に関する不安が上位に並ぶ。（図19）

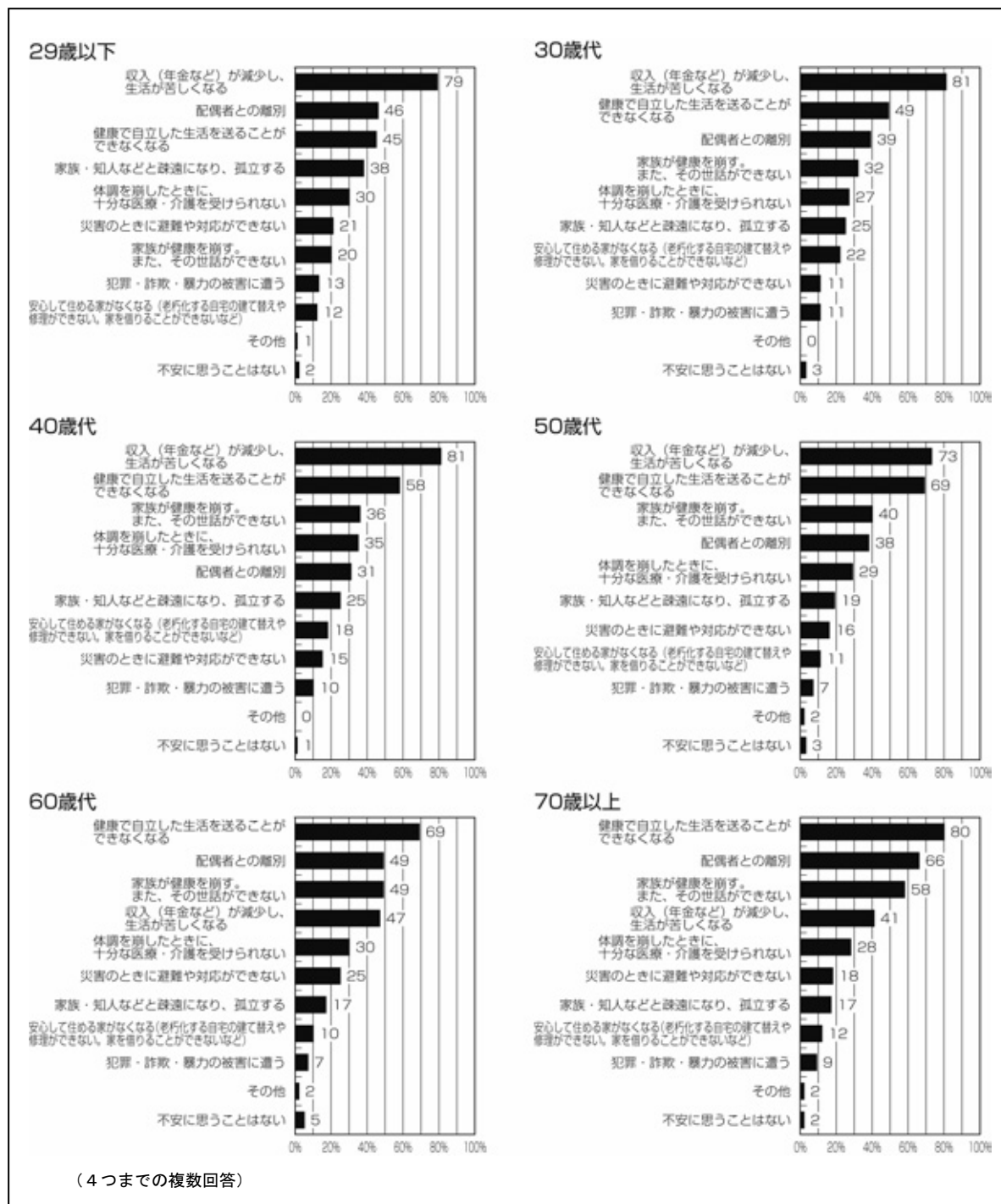
男女間（図19）で回答に顕著な差異は見られない。

図19 高齢期の生活・暮らしについて不安に思うこと（全体・男女別）



世代別（図20）で見ると、29歳以下、30歳代、40歳代では「収入が減少し、生活が苦しくなる」という家計への不安が約80%とほかの項目を引き離して高い。60歳代、70歳以上の高齢世代では家計への不安は後退し、代わりに「健康で自立した生活を送ることができなくなる」という健康不安がそれぞれ69%、80%と高く、最上位に挙げられている。

図20 高齢期の生活・暮らしについて不安に思うこと（世代別）



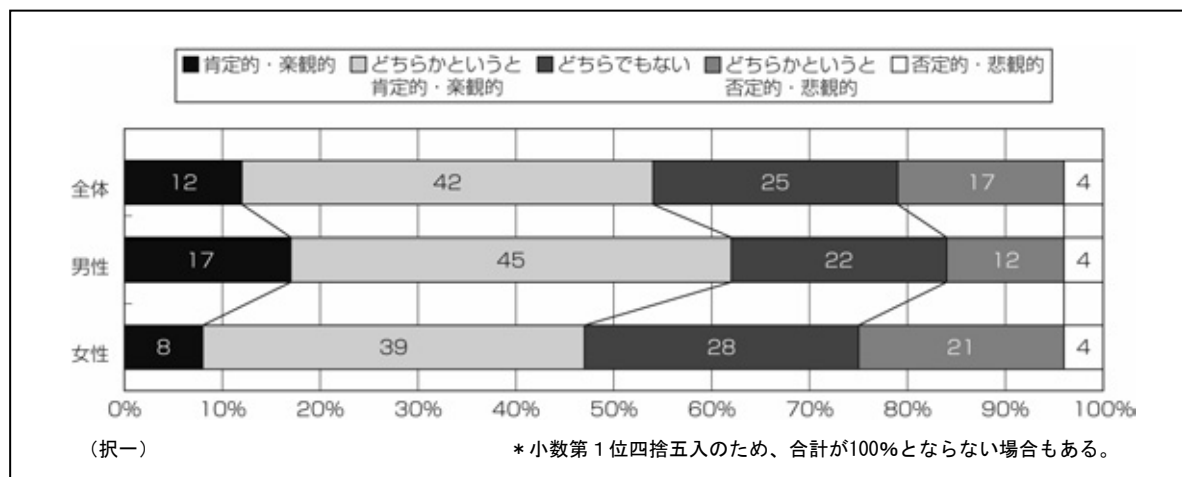
(3) 高齢期の生活・暮らしへの意識

高齢世代ほど楽観的で、若い世代では楽観と悲観が均衡

高齢期の生活・暮らしについて楽観的に考えているか、悲観的に考えているかを聞いたところ、「どちらかというとき肯定的・楽観的」が42%と最も多く、「肯定的・楽観的」12%と合わせて、半数以上が肯定的・楽観的である。4人に1人は「どちらでもない」と回答している。(図21)

男女別(図21)で見ると、男性の「どちらかというとき肯定的・楽観的」(45%)、「肯定的・楽観的」(17%)の合計は62%と、女性(47%)を15ポイント上回り、男性の方がより楽観的である。

図21 高齢期の生活・暮らしへの意識(全体・男女別)

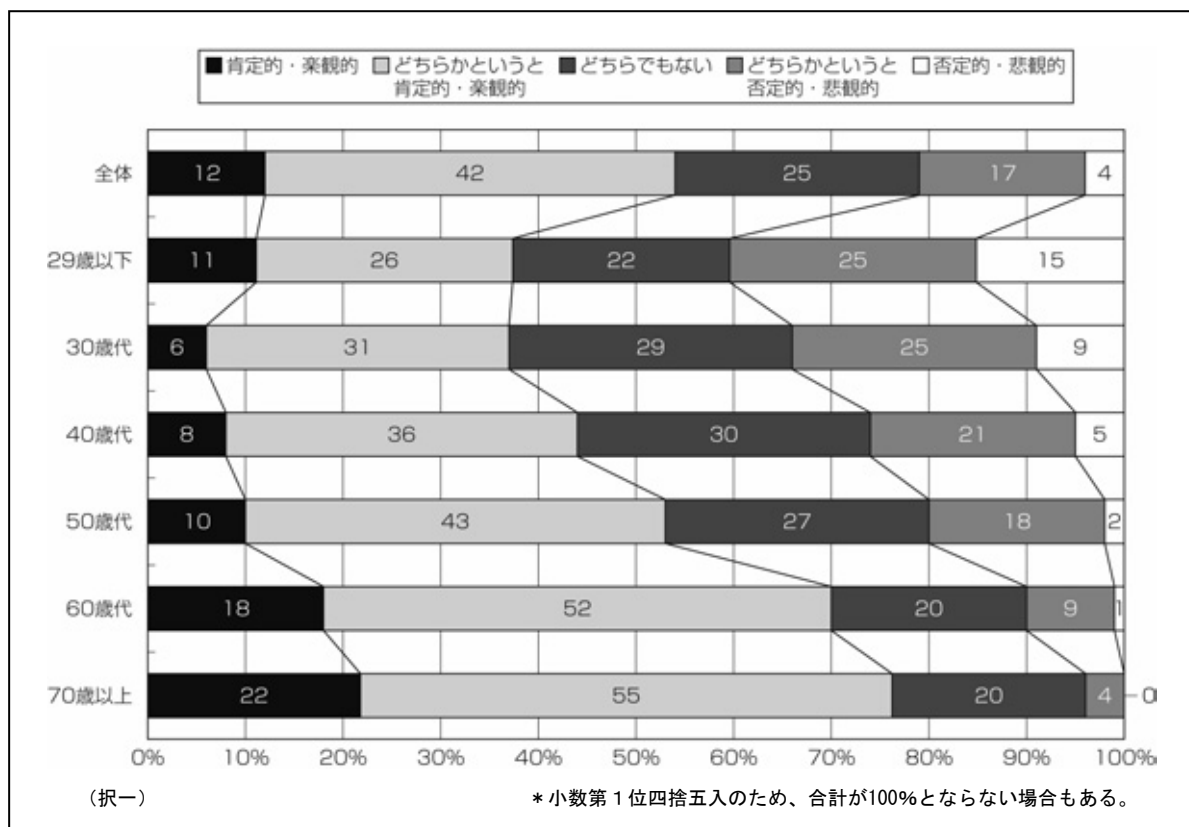


世代別（図22）で見ると、意識の違いがよく表れている。

29歳以下では「肯定的・楽観的（肯定的・楽観的／どちらかというと）」が37%で「否定的・悲観的（否定的・悲観的／どちらかというと）」が40%とわずかに悲観派が上回る。30歳代でも、楽観派と悲観派は37%対34%とほぼ拮抗している。楽観派の比率は回答者の世代が上がるにつれて高まり、60歳代、70歳以上の高齢世代では約7～8割の圧倒的多数が楽観的である。

この違いには、若い世代ほど高齢期を迎えるのが遠い将来で見通し難いことや、高齢世代ほど年相応の諦観を備え現状肯定的となることが影響していると思われる。

図22 高齢期の生活・暮らしへの意識（全体・世代別）



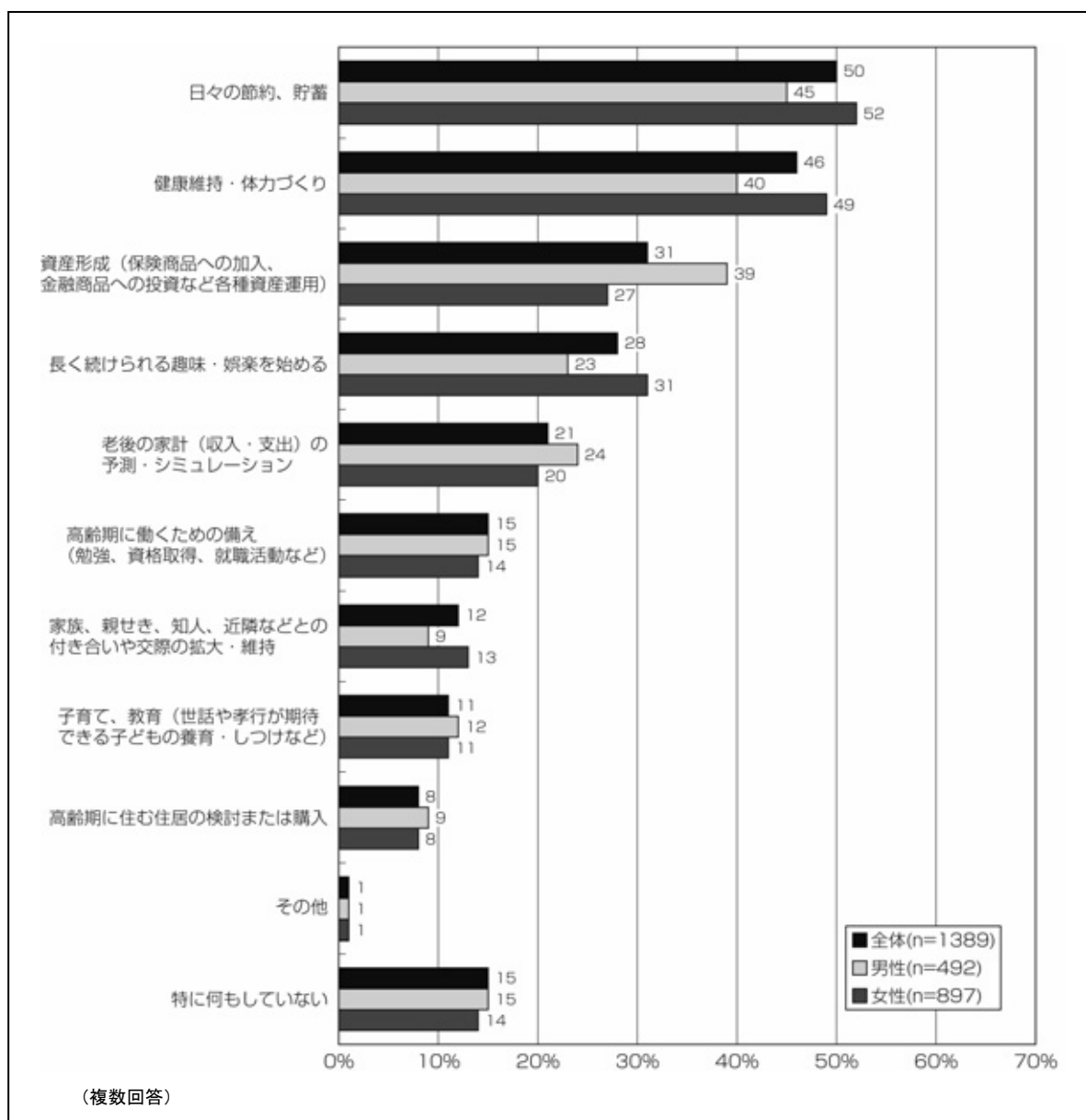
7. 高齢期に向けて備えていること<59歳以下>

59歳以下の2人に1人は、高齢期に備えて「日々の節約、貯蓄」「健康維持・体力づくり」に取り組んでいる

59歳以下の回答者に、高齢期に向けてどのような備えをしているか聞いたところ、「日々の節約、貯蓄」(50%)、「健康維持・体力づくり」(46%)が上位に挙げられ、2人に1人がこれらの備えに取り組んでいる。

「特に何もしていない」は15%であり、大多数は高齢期を意識して何らかの備えを行っている。(図23)

図23 高齢期に向けて備えていること<59歳以下> (全体・男女別)



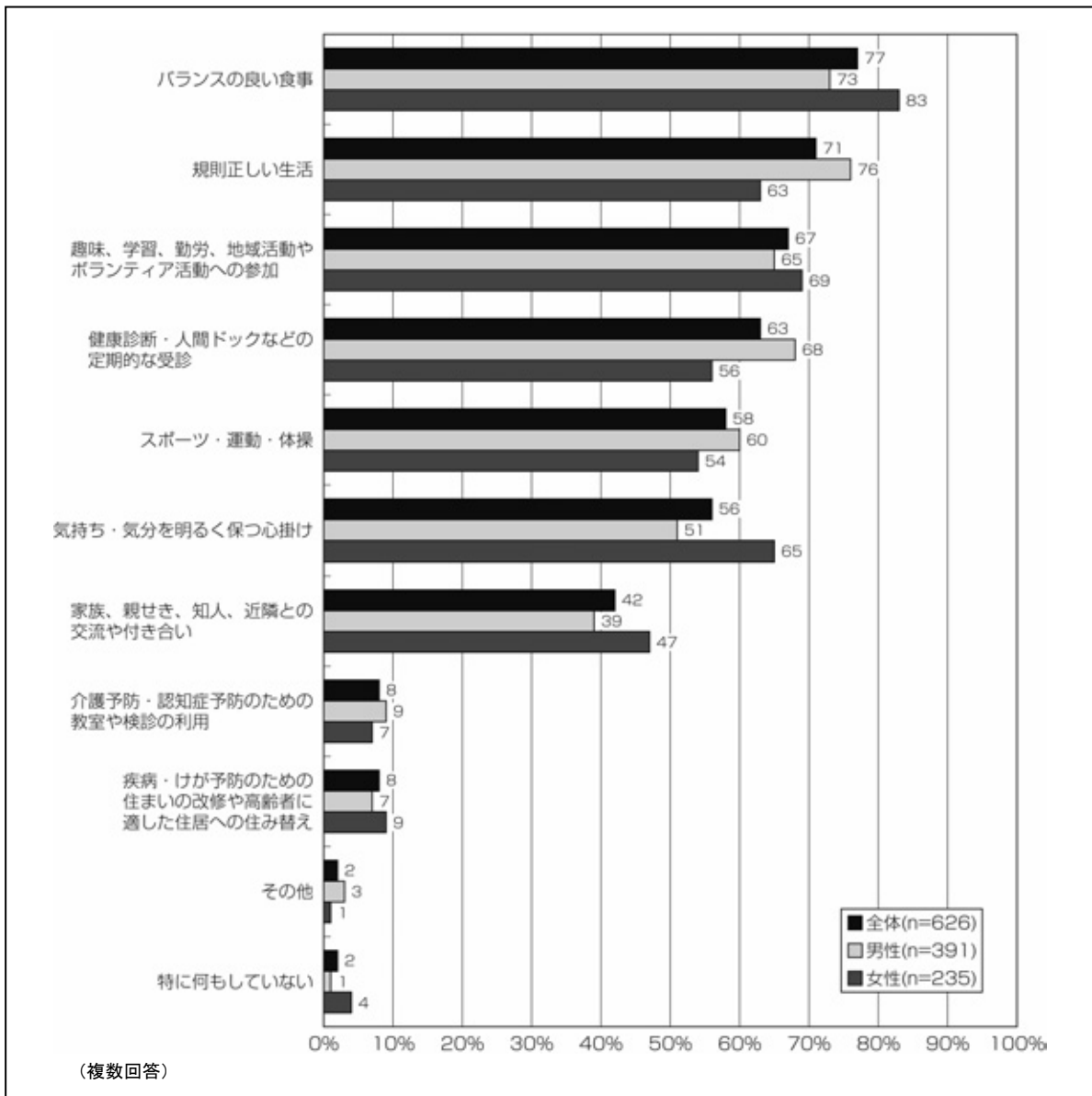
8. 自立的な生活を長く送るために取り組んでいること<60歳以上>

60歳以上の約7割が、「バランスの良い食事」「規則正しい生活」「趣味、学習、勤労、地域活動やボランティア活動への参加」を実践

60歳以上の回答者に、健康で自立的な生活を長く送るために取り組んでいることを聞いたところ、約7割が「バランスの良い食事」(77%)、「規則正しい生活」(71%)、「趣味、学習、勤労、地域活動やボランティア活動への参加」(67%)と回答している。「スポーツ・運動・体操」(58%)は、半数を超える人が取り組んでいる。

また、約6割が「健康診断・人間ドックなどの定期的な受診」(63%)を行っている一方、「介護予防・認知症予防のための教室や検診の利用」は回答者の8%にとどまっている。(図24)

図24 自立的な生活を長く送るために取り組んでいること<60歳以上> (全体・男女別)



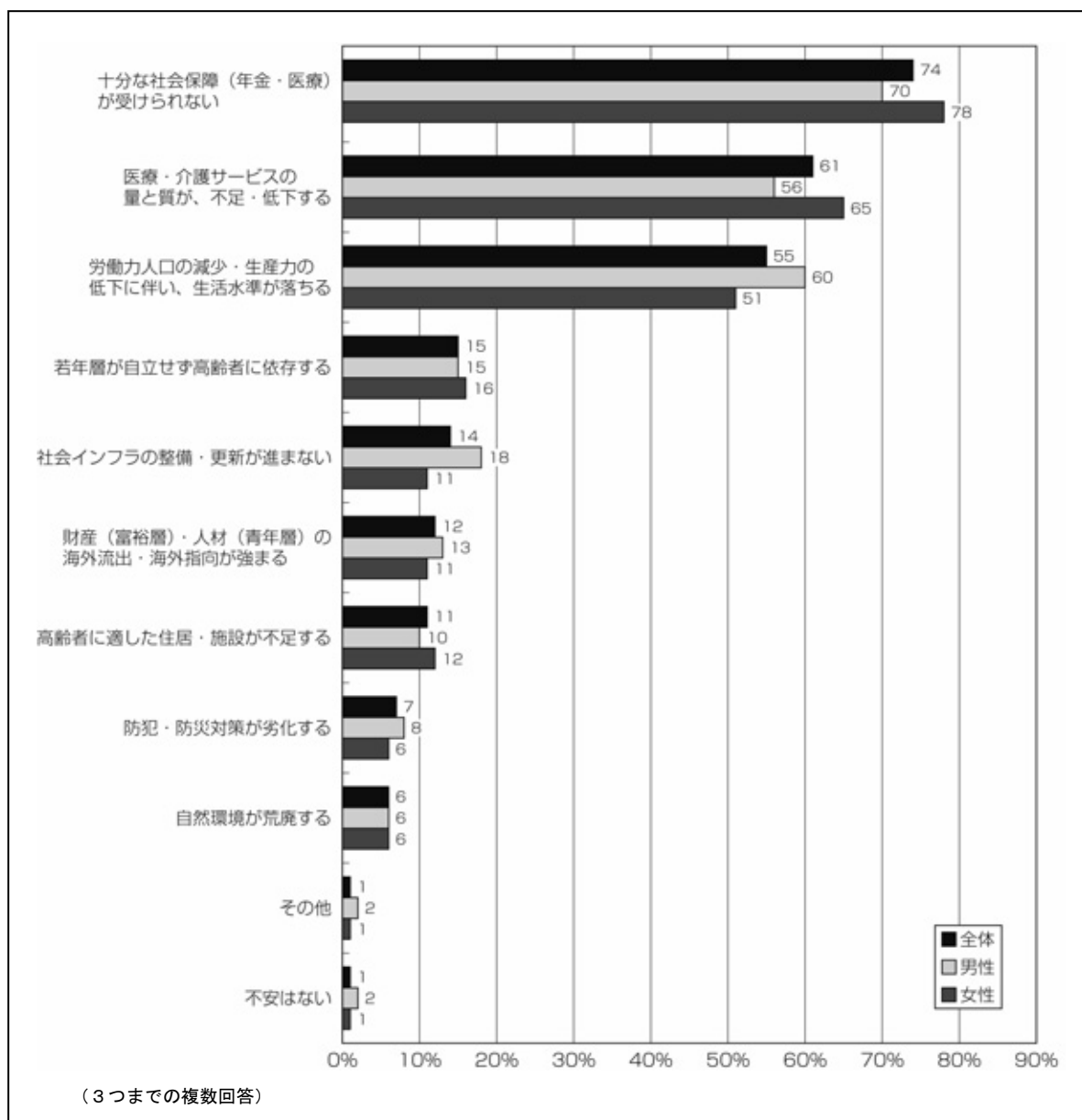
9. 高齢社会の進展について不安に感じること

「十分な社会保障（年金・医療）が受けられない」「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」が上位3項目

高齢社会の進展について不安を感じる点を聞いたところ、「十分な社会保障（年金・医療）が受けられない」（74%）、「医療・介護サービスの量と質が、不足・低下する」（61%）、「労働力人口の減少・生産力の低下に伴い、生活水準が落ちる」（55%）が上位3項目に挙げられている。

「不安はない」との回答はわずか1%である。（図25）

図25 高齢社会の進展について不安に感じること（全体・男女別）



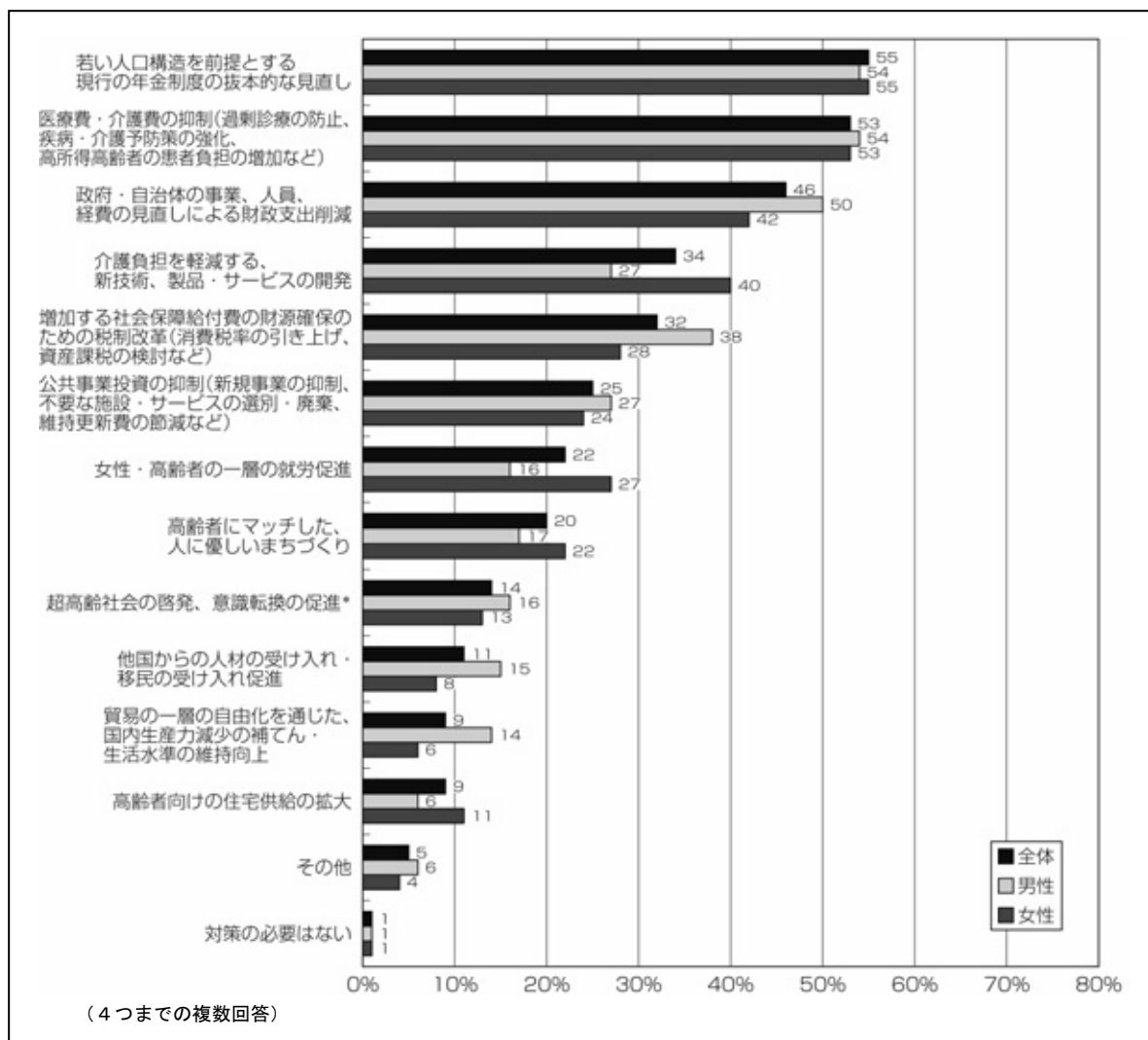
10. 高齢社会の進展に備え取るべき対策

「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」「医療費・介護費の抑制」が上位2項目

高齢社会の進展に備え取るべき対策を聞いたところ、「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」(55%)、「医療費・介護費の抑制(過剰診療の防止、疾病・介護予防策の強化、高所得高齢者の患者負担の増加など)」(53%)が5割強と高い。「政府・自治体の事業、人員、経費の見直しによる財政支出削減」(46%)は第3位に挙げられている。

社会保障改革と組み合わせて議論されている「増加する社会保障給付費の財源確保のための税制改革(消費税率の引き上げ、資産課税の検討など)」は32%と、第5位に挙げられている。(図26)

図26 高齢社会の進展に備え取るべき対策(全体・男女別)



*長期人口推移予測の周知、GDP(国内総生産)を補う経済指標の開発・活用など(例:人口一人当たり数値の重視、GNH(国民総幸福量)に類する新指標の開発)

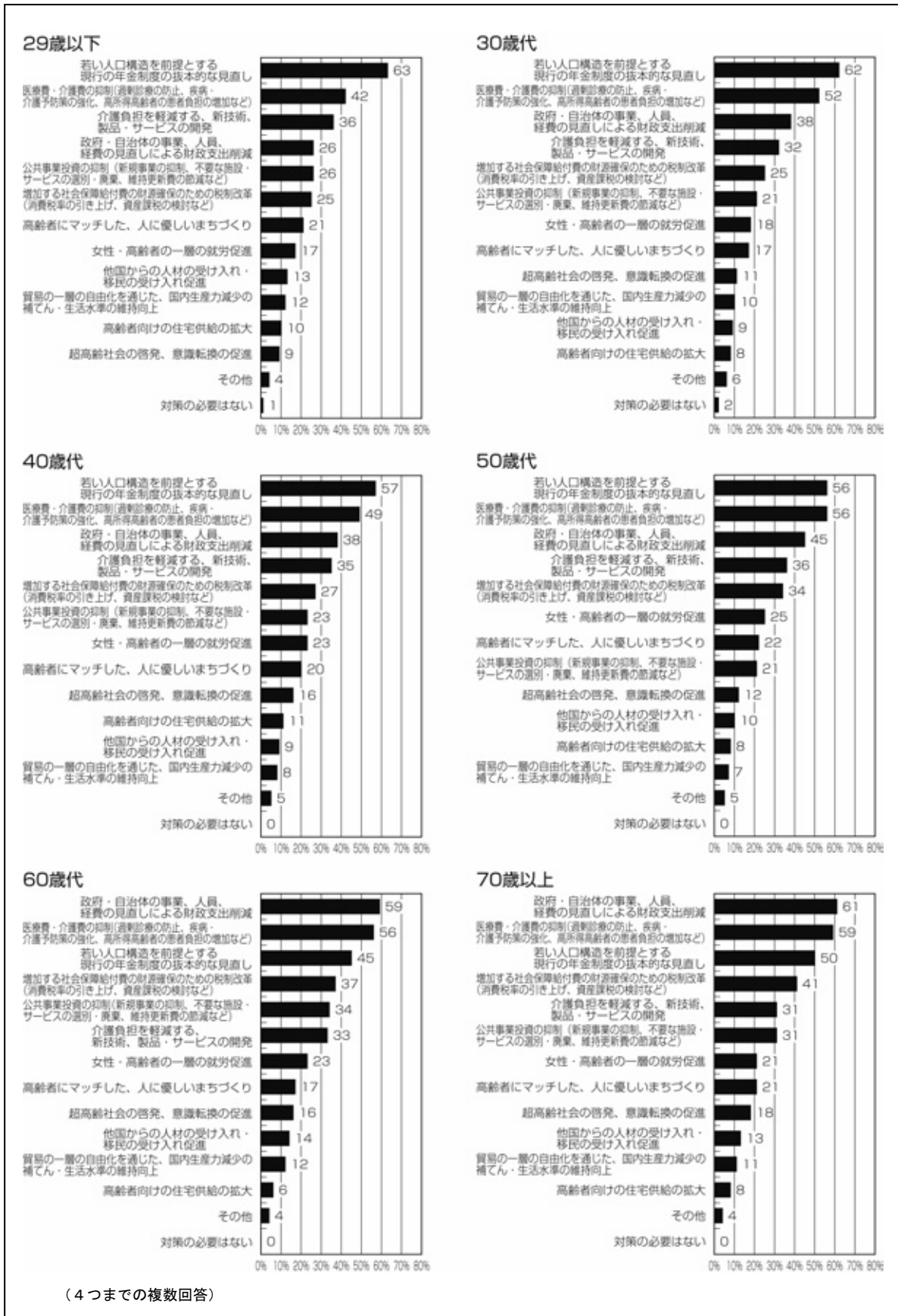
世代間（図27）で、順位に違いが見られる。

全体で第1位の「若い人口構造を前提とする現行の年金制度の抜本的な見直し」は、29歳以下および30歳代の若い年齢層で、それぞれ63%、62%という高さで最上位となっている。より少ない人数で多くの受給者を支えることとなる若い世代には、年金制度の抜本的な見直しは切実かつ喫緊の課題と広く認識されているようだ。

その一方、60歳代、70歳以上の高齢世代では、支持率は低くないものの第3位と後退している。60歳代、70歳以上の2世代を通じた第1位は、「政府・自治体の事業、人員、経費の見直しによる財政支出削減」である。

なお、全体で第2位の「医療費・介護費の抑制」は、50歳代で第1位、そのほかのすべての世代において第2位と上位になっている。

図27 高齢社会の進展に備え取るべき対策（世代別）



(4つまでの複数回答)

高齢社会に関する意識調査報告書

2012年5月

発行／一般財団法人 経済広報センター 常務理事・事務局長 中山 洋

文責・担当：国内広報部 主任研究員 小寺 隆夫

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-3-2 経団連会館19階

TEL：03-6741-0021 FAX：03-6741-0022